

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々と分かち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.14 2008年1月号

カンボジア スタディ・ツアー

TICOの若手の会“TICOユース”がカンボジアを訪れて、いろいろ見て、交わって、学んで、考えてきました。

2ページ

ブノンペン市救急 プロジェクト始動

TICOカンボジア事務所が開設されました。いよいよ本格的な活動が始まります。

4ページ

新規ローン融資

ザンビアで成功を取めている農村での小規模ローン活動に、新たに加わったグループをご紹介します。

5ページ

診療所ついに着工

ザンビア・モンボシ地区での保健プロジェクトで、住民念願の簡易診療所の建設が始まりました。予想以上にお金がかかります。

5ページ

ヒダノ修一さんの チャリティコンサート

毎年恒例となりました太鼓コンサート、今回は高松にも拡大した四国ツアーとなりました。

6ページ

TICO道場で合宿

国際協力を考えるワークショップから農業体験まで盛りだくさんの国内合宿に、またたくさんの学生さんが参加してくれました。

7ページ

TICOはあきらめない！ 変革は可能だ。

TICO 代表 吉田 修

久しぶりにマラウイとザンビアを訪問した。3つのが印象に残った。

1つは、孤児の増加。どこに行っても孤児のことが問題になっている。両国ともユニセフの統計で90万人（両国とも全人口1200万ほど）くらいの孤児がいる。その多くはAIDSで両親をなくしたAIDS孤児であり、その中には母子感染により生まれながらHIV (+) の子供が含まれる。アフリカでは母親がHIV (+) の場合の母子感染率は40%と言われている。その子供たちに対し、AIDS治療薬の普及率はまだ7%程度である。ほとんどの子供は治療も受けられず、死亡している。

2つめは、森林破壊。マラウイの首都リロングエ南部の小高い山々がすべて禿山になっていた。青年海外協力隊で赴任していた18年ほど前は確かに緑の木々に覆われていた。アフリカの森林が消失することは、地球環境にとって、人類にとって致命的な打撃であることは間違いない。

3つめは物価上昇。原油高は日本と同じである。それ以上に建築資材が高騰している。TICOが建築中の小さなヘルスポスト（診療所）も予定してい



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）1958年徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療援助活動を実施。現在徳島県山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。

た建築費の3倍近い。中国景気や南アのワールドカップの影響らしい。

アフリカの人々の暮らしは、ますます厳しく絶望的に思われるが、そんな中でもTICOが関わっている地域で出会った人々は、村人が自主運営する学校のボランティアの先生や、小規模ローンで起業したグループなど、前向きにたくましく暮らしていた。カチョファさんも救急の仕事に奮闘していた。しっかり走っている救急車も見た。

日本では、「テロとの戦い」自衛隊のインド洋での給油活動の是非が問題となっている。政府与党

はこれが国際公約だと主張するが、日本が中東の石油を確保するためのアメリカとの取引としか思えない。国際社会が掲げる最重要の約束「ミレニアム開発目標」（内容はぜひ調べてみてください）についてはほとんど話題に上らない。地球温暖化対策の国際公約である京都議定書の目標もこのままではとても達成できそうにない。政府開発援助ODAも、国連が目標としている国民総所得の0.7%にはほど遠い0.2%で、しかも近年減少している。これらが本当の日本の守るべき国際公約であろう。日本の国際的な地位はどんどん低下しているように思える。（北欧の国々は国際公約を守っている）

国民の生活の根幹である農業は衰退の一途をたどり、環境と水の源である森林は荒れ果て、あちこちに不法投棄のゴミの山ができていく。ほとんど輸入に頼っている小麦や大豆の値段はどんどん上昇する。静かにオイルショックも始まっている。年金問題も天下りも特殊法人も汚職もなくならない。日本はどうなってしまうのだろうか？

最も心配なことは、今の日本に、今の日本人に、大きな変革を成し遂げるエネルギーを感じないことである。怒りのエネルギーさえ感じないことである。世の中の不正や、政府の無策に対して、あまりに日常になり慣らされてしまったのだろうか。

原点に戻って「無力感を克服する」ことから始めませんか？

カンボジア・スタディツアー

“TICO Youth” Cambodia Study Tour 2007



2007年8月23～31日にわたり、TICOユース第1回カンボジアスタディーツアーが実施されました。現地の実情を知ることで自らを見返り、国際協力に必要な理念を考えるとともに、ツアーの経験を今後の活動に生かすという目的のもと、ユースメンバーより7名が参加しました。短期間ではありましたが、TICOのプロジェクトサイトとなるスラム地区や公立病院の見学、スラム地区の高校生との交流、援助活動に携わる日本人の方々のお話などから多くのことを学びました。

メンバーの中には海外は初めてという人から数カ国への渡航経験がある人、カンボジア2度目の人もいて、感じ方も人それぞれです。日ごとに膨れあがる期待と少し不安の入り混じった気持ちで私たちは出発しました。

降り立ったプノンペンの街はみんなの目にどう映ったのでしょうか？車窓から見える町並みの様子。慌ただしく鳴り響く車のクラクション、どこからともなくたよってくる何ともいえない街のおい。日本での計画・ふり返りを含め、現地での見るもの聞くものす

べてが“学び”となるのがスタディーツアーです。

ツアー開催にあたっては参加メンバーを中心にミーティングや事前学習を行い、歴史や文化、保健や教育の問題や訪問団体について学びました。これにより見学のポイントが明確になり、現地での理解を深めるのに役立ちました。ここからは、各訪問先におけるメンバーの感想をわずかながら紹介したいと思います。

2日目 午前／スラム地区訪問

ロタ君と話す中で、「何で高校に行ったの？」と聞かれた。実際、何で高校に行ったかなんて考えたことなかった。当たり前のように高校進学していた。しかし、この人々にとっては高校に通えることは嬉しいことで、学べることは幸せな事だと知った。ロタ君は「将来先生になりたいんだ。だから、もっと英語がうまく話せるようになりたい。」って言っていた。実際、ロタ君が高校に通って英語を学んだのは1年間で3ヶ月程度らしい。少なくとも6年間は勉強している

私よりもはるかに英語が身についていると感じた。きっと勉強に対する姿勢の違いかな…もう少し、勉強に対する姿勢を改めようって思った。

午後／トゥールスレーン博物館（ポルポト政権時代虐殺が行われた刑務所）

あれは人間がすることではない。人類は2度と、あんな虐殺の過ちを犯してはならない。戦争や殺戮のない未来をつくるために、我々は何をすべきだろうか。私は様々な問題を人々と共に考え、平和を発信できるようになりたいと強く願う。人間のあんな残虐な行為は、この世からなくしたいから。

3～5日目／移動日・アンコール遺跡群見学

建造物の素晴らしさに息を呑んだのはいうまでもない。建物以外で印象的だったのは多くの観光客の周りにたくさんの子供がアクセサリなどを売って商売していたこと。「3個で1ドル」と日本語で話しかけてきた。自分でも整理がうまくつかない複雑な気分になった。



6日目午前／TICO・セカンドハンド事業実施対象地区視察

(公立病院見学を通して) 私は、この病院で、赤ちゃんを産んで、幸せそうなお母さんを見て本当にうれしかったです。TICOやセカンドハンドさんがサポートした環境が、地元の人々にこんなにも有効に利用されている状況を見ると、自分たちでも何かできるんじゃないか、何か手伝いたいと思いました。

午後／JICAカンボジア事務所（JICAプラザ）見学

職員の方の話を聞いて、人々の心をつかみ、動かせないと素晴らしいプロジェクトでも成果を残せないこと、またその難しさがうかがえました。しかし、10年20年経ったら確実に変わるとの確信に満ちた言葉に、職員の皆さんが希望とやりがいをもって仕事をされていることがうかがえました。今後TICOはJICAと連携事業を開始しますが、活動がどのような成果となって表れるのか楽しみです。

7日目午前／国立小児病院外科病棟・給食施設見学（日本のNGO・FIDRの支援による）

さまざまな場所の視察でも言われてきたコミュニティの人と一緒に開発していくこ

と、それがここでも行われていた。現地の調理員と話し合いながら、患者さんが退院しても実際の生活で取り入れやすいような伝統的な食材を使って病院食を作っているらしい。後には現地の人たちで献立作成ができるよう、医師がタイに研修行ったりするとおっしゃった。

確かに、知識をもった者が自ら実践しても、そのときよくなるだけで、その人が帰ってしまったらまた元に戻ってしまう。支援していく人は現地の人々に自分の持っている知識を伝えることが一番大切なんだと思った。

午後／WHOカンボジア事務所訪問、日本人スタッフの遠田医師と面会

今でも遠田先生がおっしゃった「自分の目を見たこと、考えたことが真実だ」という言葉は心の中に残っています。また、先生は今の仕事に関して「人と人とのリアクションで仕事をしている」とおっしゃっていました。先生がアイデアを出し、現地の人が仕事をする。だから、現地の人がどう気にいるか、そのアイデアがどう残っていくか。「自分たちができることをする」ともおっしゃっていました。やはり、何をするにしても、人と人と

のコミュニケーションが、次につなげていくために必要なのだ、と再確認しました。

…少しでもメンバーの感動が伝わりましたでしょうか？このツアーはTICOの現地での活動に直に触れることのできる非常に良い機会です。来年以降も継続して行っていく予定です。今後はさらにユースが主体的に活動し、回を重ねるごとにより充実したツアーにしていきたいと思います。

最後にツアー開催にあたり、TICOやセカンドハンドの皆様を始め、多くの方々の多大なご協力を賜りましたこと、ユースメンバー一同、心より感謝申し上げます。ツアーで得たものをユースの活動はじめ、今後の生活、人生に良いかたちで活かせるよう努めていきたいと思っています。本当にありがとうございます。

現在、TICOユースはイベントを通して募金活動を行っています。今回訪問した診療所への医療機器を支援するためです。この報告は次号の”Face to Face”でお伝えします。

(五十嵐久美子)

参加者の感想

2度目のカンボジア、その非常な発展振りに目を見張りました。その陰で格差は広がる一方だそうです。その経済の流れの中に自分もいます。自分はどうかあるべきか。人々のことを忘れずに、考え行動したいと思います。(関野聡美)

TICOとカンボジアの協働関係を垣間見たことで、未来を生きる人びとやこの地球上で生きるいのちと共に、豊かさを分かち合う責務が我々にあることを痛感しました。私たちには権利と責任があり、社会を変える力がある。そう信じて、足元からの行

動を根気強く実践します。その実践がカンボジアや日本、そして世界中の平和構築に貢献することを願っています。(庄野真代)

私がこの研修で得たものは人と人の結び付きです。皆様から集められた支援金により、医療・教育施設が作られている地域の人々は私達を笑顔で迎え入れてくれました。彼らが私たちに与えてくれた温かい笑顔は、皆様への感謝の現れです。どうかその事を覚えていて下さい。TICOに入って間もないですが、この貴重な体験を与えてくださった全ての方に感謝します。そしてこれから自分に出来る事を少しず

つ見つけ、実行していきたいとおもいます。(森川未央)

カンボジア……綺麗な空とハニカミ笑顔が印象的なあたたかい国。今回が初めてのスタツア参加。この旅で感じたことは、人との繋がりが大切でこと。現地の人たちの変わりたいという意志とボランティア側の協力したって気持ちが一つになったとき変化が起こるって感じた。(上木原奈保子)

今回が初めての海外経験だった私にとって、カンボジアでの7日間は衝撃の連続でした。カンボジアという国に触れ、改めて日本に帰ってくると、これまでにはなかった考え方が生まれたり、また新しい見方で日本や海

外を見ることができるようになりました。今という時期に、このような体験ができて本当によかったです。ありがとうございました。(池田翔子)

先輩方のようにうまく言葉では言い表せないが、何かしら強い刺激を受けたことは違いない。今まで関心があった国際協力の実際の活動を自分の目で見る事ができた。いろんな人に出会い、すべて自らの目で、体で事実を見ること、体験することは、そして考えることはやはり何物にも変えがたいものである。このスタツアの体験をみんなと共有し、「地球人」としてできることを考え、実践していきたいと思う。(浦出 華)



急いで患者を病院へ運べ

カンボジア／プノンペン市救急システム構築事業

カンボジアの交通事故死亡率は、登録車両台数に対してASEANの中でワースト1位・2位を争う状況といわれており、現在でも深刻な問題となっています。交通事故が発生しても、救急搬送システムが無い場合、病院に迅速かつ適切にアクセスできない状況です。多くの場合は利用料金が非常に高い民間の救急車によって搬送されることがありますが、国内でも救急車で病院へ搬送された事案は33%にとどまっています。カンボジアではバイク事故が多く怪我人の多くは低所得層の人々といわれています。特にプノンペン市西部地区に急増する低所得層の人々にとっては、怪我や病気になり貧困から脱却できない悪循環があります。現在のカンボジアの医療技術でも救命できるレベルで医療機関へ迅速に到達することが絶対的に必要です。これを支える公正な救急システムの整備が望まれています。そこで、TICOとセカンドハンドは、こ

れまでセカンドハンドが長年継続的に医療分野にて支援を行ってきた西部地区（人口34万人）を中心に3つの活動を行います。

1. スラム地域における緊急対応のための環境整備

西部地区にはスラムで生活している数多くの人々がいます。彼らが大怪我をしたり急病になった場合でも重症化するまで放置するなど、迅速に対処するシステムがなく、手遅れになる場合も少なくありません。そこで、その地域に居住する地域保健ボランティアさんたちが、地域の中で緊急事態が発生した場合に、迅速に情報を受け付けるとともに適切なアドバイスを行い、かつ診療所へ紹介をし、応急処置が行えるよう相互扶助の仕組みを強化します。これにより病院へも患者さ

んの情報が早く伝わり、救急車の派遣や患者の受け入れなどの対応を今よりもスムーズに行える環境が作られます。

2. 公立診療所の緊急対応能力アップ

現在西部地区には緊急事案に対応できる医療機関がなく、人々はプノンペン市内の国立病院へ移動しなければならず、時間的にも救命が困難であったり、患者のみならず家族も経済的に大きな負担を強いられています。

よって、西部地区の病院で緊急事案に対応できるようにするために、医療従事者の技術向上と基礎医療資機材の整備を行います。もちろん、病院でできることは限られていますので、状況を判断し適切に上位病院に転送することも重要な能力の一つということになります。

3. 患者搬送システムの構築

現在、西部地区には人口34万人に対して公的な救急車は1台しかありません。この状況では、上記2点を改善しても、患者が医療機関までたどり着くには困難な状況といえます。

プロジェクトでは、救急車を導入するだけでなく救急車がより効率よく運用されるための通信システムや患者により早く処置を開始することができる救急隊の整備も同時に行います。これは現行の保健政策に則った体制で行いますので、一昼夜に完成するものではありません。約3～5年の時間をかけて、上記3つの活動が有機的につながりを持ち、ひとつのシステムとして動くことを目指しています。

1, 2の活動に関しては、JICA国際協力機構のNGO連携草の根パートナー事業として実施いたします。(五十嵐 仁)

継続中です！ 小規模ローン

2003年からザンビアのチベンビ地域で始めた農村開発ローン。WAHE（早ばつに強い村づくり）プロジェクトの一部で、「農民の健全化・より良い生活を目指す」ための小額の融資です。上限額100万クワチャ（約3万円）、返済期限は1年、対象はグループのみ、などが融資の条件になっています。

2007年9月までに10グループ13事業にローンの締結を行ってきました。事業の内容は、

- ☺足踏みポンプによる菜園拡大
- ☺養鶏（2件）
- ☺手押しポンプ設置による井戸再生
- ☺搾油機によるひまわり油精製
- ☺タックショップ（売店）（2件）
- ☺保育園整備
- ☺食料雑貨店の経営
- ☺古着の販売など（4件）です。

返済回収率は80%、現在5事業が返済中です。

申請審査を通過したものの、残念ながら事業が中止になったものが過去1件あります。また、申請されたものの却下された案件は15件ありました。それらの申請内容は、養

ザンビアもやっています

鶏6件、足踏みポンプによる灌漑3件、古着の販売2件、大工業・ひまわり搾油と絞りがすの製造・売店の経営・有機園芸各1件。却下の理由は、グループ経験不足、消耗品購入目的のため、など。グループにまとまりがあること、リーダーの資質なども審査のうえで、重要な鍵となっています。

2007年に入って、新規に始めた事業を紹介します。

ティエセコグループ（古着と魚の販売）



男女3人ずつのグループ。「古着で衣類の提供を、魚で栄養の改善を試みたい」と申請を受けました。事業開始後、古着だけではなく新品の服やサンダルなどを販売したり、その売り上げで日用雑貨品を仕入れるなど、地域の人のニーズに合わせて店の経営をしています。将来は、保育園を作って孤児の支援をしたいと考えて活動中です。

チティベ女性の会（古着と雑貨の販売）



2度目の融資を受ける女性17名のグループ。メンバーを増やし、古着だけではなく、商売の幅を増やしたいと奮闘中。いつも店の周りには女性が集い、おしゃべりにも花が咲き、にぎやかにやっています。

カリケンカクラブ（古着の販売と制服の縫製・販売）



こちらも2度目の登場です。初めのローンで食料雑貨店を開店。売り上げで器を購入、メンバーで落花生を栽培し、それをピーナッツバターに加工して販売するなど、コツコツと活動の幅を広げています。さらに活動の幅を広げるため、また自分たちの持つ

ている機械と技術を活かすため、この度のローン申請となりました。

起業を支援し、技術・やる気・資産をバランスよく増やして、生活改善につなげよう…というこの事業へのサポーターを募集中です。皆様からの応援、よろしくお願いします。(山本ひとみ)

モンボシ診療所着工、そして資金不足

前号でお伝えしたように、ザンビアの首都から100キロ離れたところに位置するモンボシ地域で『農村地域プライマリーヘルスケア・プロジェクト』が8月から始まりました。

プロジェクトの最初にして最大の仕事が、簡易診療所（ヘルスポスト）の建築です。これがモンボシにできることで、最寄りの診療所が30キロも離れている現状から脱することができるのはもちろんのこと、ヘルスポストを核にして地域住民ボランティアによる保健活動が進んでいくことになります。

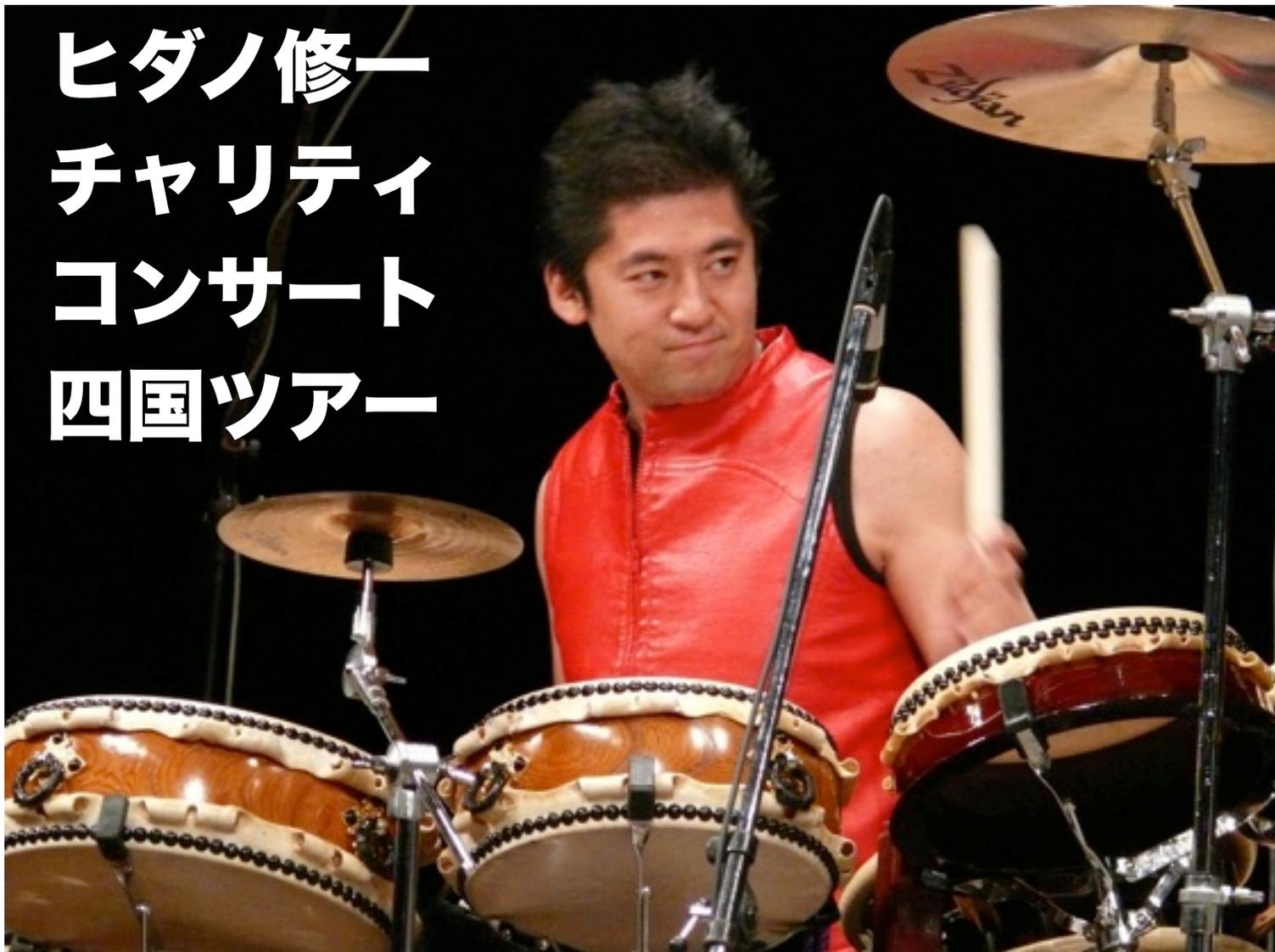
いざ建築にかかろうとすると、タイミングが悪いことに、ザンビアを含む南



部アフリカ地域では建築資材の価格が急激に高騰していました。セメントは1年で2倍以上に値上がりしています。その原因としては、2010年に南アフリカで開かれるサッカーの世界カップに向けて建築ラッシュとなって資材が不足していることや、世界的な原油価格の上昇など様々考えられます。そのため、ヘルスポストの建築費も当初予算を500万円以上オーバーしてしまっています。雨季に入ると建築作業に支障があるため、11月に着工はしたものの、資金繰りはまだ目処がついていません。

ヘルスポスト完成のために、皆さんからのよりいっそうのご支援をよろしくお願いいたします。当プロジェクトのブログ <http://zamphc.blogspot.com/> からのご寄付いただけます。(田淵幸一郎)

ヒダノ修一 チャリティ コンサート 四国ツアー



毎年恒例ヒダノ修一さんの太鼓コンサートが7月13日、14日、15日に四国で開催されました。今年は徳島2会場（徳島大学永井記念ホール・吉野川公民館）、高松会場（サンポート高松）と3ヶ所を、ヒダノさんと他3名のアーティストの方々とともにツアーを行いました。体の芯まで揺さぶるほどの迫力ある大太鼓に魅了されたかと思うと、三味線とともに民謡を奏で、サックスやラテンキーボードとともにジャズやラテンのリズムに太鼓がなんととも素敵

にマッチしてしまうのでした。新たなヒダノさんの魅力を再発見した瞬間でした。

また、徳島大会場では台風の中での開催となり、準備に参加したTICOユースメンバーも雨風に打たれながら、大切な楽器の搬入など貴重な体験をしました。高松会場ではNPO法人セカンドハンドが主体となりコンサートが開催されました。

毎回参加しているというリピーターの方、初めて参加した方、ヒダノさんを追っかけて県外

から駆けつけられた方など、さまざまな方との出会いがありました。コンサートに参加してくださった皆様、そしてボランティアとして準備に関わってくださった多くの皆様、そして何と云っても素晴らしい演奏を提供してくださったヒダノさんとミュージシャンの皆様にご心から感謝をいたします。

コンサートの収益金213,289円はザンビア村落開発支援およびカンボジア医療支援に使わせていただきます。（五十嵐久美子）



左から ヒダノ修一（和太鼓）、新田昌弘（津軽三味線）、石田裕人（サックス）、進藤克己（ラテンキーボード）

国内合宿

ようこそ徳島の“TICO道場”へ。夏から秋にかけて、今年も多く多くの学生さんが全国各地からTICOを訪れ、地球規模の課題について学びを深めた。



日本外国語専門学校

「ものづくり」を通じて世界と自分たちの生活のつながりを考える」をテーマに12名が3泊4日の合宿を行った。



(上左) TICOユースも参加
(上右) さまざまな模様を作り出す藍染めに挑戦



(左) 毎日早朝と夕方に畑作業(題字写真) 穴吹川での川遊び

愛媛大学法文学部総合政策学科

「NPOについて学ぶ」というテーマで、TICOに関係する人々にインタビューが行われた。参加メンバー17名は研究室で環境問題の研究に取り組んでいる。地球規模の課題を考える「宇宙ステーション」のワークショップでは、現実的に今の環境では人は生きていけないことを実感。最終的に「自分に何ができるのか、行動に移す」ということを考える合宿となった。毎朝の田んぼの草取りは結構きつかった…お百姓さんの苦勞を知った。



国際医学生連盟 IFMSA

日本各地の医学系学部にも所属する学生6名が「アフリカビレッジプロジェクト2期生」として、来春のザンビア渡航にむけて勉強会を行った。第1期生が行った世帯調査などを参考に、現在TICOが実施している基礎保健プロジェクトに還元できるような調査をするべく、皆で知恵を出し合った。ザンビアへ想いを馳せながら…。

地域活動家のためのファシリテーター養成研修 開催

TICOは団体設立当初から学校や地域で「地球人教育」と称した講義や講演を数多く行ってきた。その際に、参加者に「新たな発見」をしてもらうことを期待している。このような活動を行って

いるTICOのスタッフと、新たに開発教育に取り組もうとしているTICOユースのメンバーを中心



に「ファシリテーター養成研修」を開催する運びとなった。名古屋から、日本における開発教育・平和教育の第一人者である池住義憲さんをお招きして、地域で活動する団体のスタッフや青年海外協力隊の帰国された方々も含め、総勢30名が参加した。

いわゆる教材の使い方やワークショップの進め方といったようなファシリテーターの手法について学ぶことを想像していた。しかし、4日間の研修を通して行ったことは、自分自身の生き方を振り返るという作業であったということに気づいた。自分自身が何を考え、何を期待し、何を求めているのか、ということがファシリテーションの基本にあるということを発見したときは、カルチャーショックを受けた。そして何よりも、研修に参加した人々との出会いは素晴らしかった。それぞれ



の人生のバックグラウンドを持つ人達が、研修を通して一つの大きな絆でつながれた。

参加者が研修終了後に残した一言(これらの言葉からも参加者がファシリテーションの奥深さを学んだことがうかがえる)

他者を信じる心の強さ、想像(創造)力、同化、待つ、持ち味、笑顔、共に創造する喜び、和、気づき、共育、Believe、愛、違いの理解、感性を磨く、他に己ならず、トータルで見る・考える、などなど…。

この事業を支援してくださったJICA国際協力機構四国支部様にこの場を借りて感謝を申し上げます。

(写真左) 演劇による問題提起手法を実践
(写真上) 老若男女入り交じっての討議

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

新たに入会された方

伊原、大島、木曾正子、山元香代子、天田大輔、馬場節子、田近映子、西口勇子

会員を更新された方

佐藤三千子、梅川昭子、三浦洋子、関谷晴孝、ホウエツ病院、工藤敏信、本庄敬、林、五十嵐仁、五十嵐久美子、河合龍男、河合栄枝、(株)幸耀、原田功恵、岡崎明美、松井美香、吉見千代、浮森和美、入交秋子、廣瀬文代、福士庸二、福士美幸、佐古和雄、佐古友美、吉田修、吉田益子、橋本浩一、福井康雄、

福井照実、中村純子、寺田由紀、鈴木薫、傍示桂子、篠原幸隆、篠原弘子、住友和子、地造津根子、武田律、酒巻栄子、井原宏、寺口美香、田岡敬子、木村節子、六車ハル工、田淵幸一郎、(株)坂東印刷、瀧浩樹、峰尾武、饗場和彦、鏡登志子、松田恵美子、久保真一、遠藤千鶴、井口千陽、中谷加奈子、渡部豪、池見真由

寄付をいただいた方

渡部豪、工藤甫、宗本クニコ、佐藤純子、吉田修、橋本伸子、横浜市立鴨志田中学校、

TUKTUK、中上邦光、佐々木永子、船津まさえ、杉山愛、五十嵐仁、五十嵐久美子、美馬文子、田淵幸男、福士庸二、松浦サダ子、秋月良子、溜雅人、武田義治、福士美幸、高木クニ子、来住、西尾、永井、山元香代子、河合栄枝、谷口克之、日本外国語専門学校、原田恵子、原田静子、川井、岡田勇、宗本、戸井、みんなのチャリティー、TICOサポートクラブ

- 2007年5月26日～10月31日分
- 苗字のみ掲載希望の方は苗字だけにしています。
- 順不同、敬称略

ご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649
(加入者名) TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店
(店番号344) 普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、
トクビ) テイコ

募金箱 — さくら診療所(徳島県吉野川市)に常設

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートして下さる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員 個人 ¥12,000
学生 ¥6,000
団体 ¥15,000

正会員 ¥12,000

(通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい)

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

へお願いいたします。

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

編集後記

*まず、前号を昨年6月に発行して以来、半年も間があいてしまったことをお詫び申し上げます。言い訳ではありませんが、今回から編集はカンボジアで、デザインはザンビアで、発送は徳島で、とインターネットを駆使した地球規模の作業になっていることも一因です。

*今回の“Face to Face”を手に取られて驚いた方もいらっしゃるでしょう。TICOのニュースレターもついにオールカラーになりました。といっても白黒印刷のときと印刷費は変わりません。パソコンで最後までレイアウトを仕上げ、そのデータをインターネット経由で印刷屋に入稿します。こうして費用をかけることなく、会員の皆さんにより多くの情報を見やすくお届けできることになりました。

TICOニュースレター Face to Face 第14号

2008年1月発行 発行人：吉田 修
編集：五十嵐久美子 デザイン：田淵幸一郎

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4
電話・ファクス：0883-42-2271
携帯：090-7786-3193
メール：tico-hq@tico.or.jp
ウェブサイト：www.tico.or.jp